

ハバナ(キューバ) 2010年



**フィデル・カストロ前国家評議会議長**  
キューバ政府の招待で面会が実現。国会議事堂にあたる「ハバナ会議宮殿」で行われた被爆者による証言スピーチに熱心に耳を傾け、核兵器廃絶への強い思いを表明した。

アテネ(ギリシャ) 2015年



**パプロプロス大統領**  
ギリシャ大統領府にて面会を果たす。同国議会にて国会議員に向け被爆証言を行い、核兵器のない世界に向けての各国の連帯の重要性をアピールした。

ニューヨーク(米国) 2016年



**国連で核兵器禁止条約を求める**  
ニューヨーク寄港時国連本部内にて、ピースボート、マーシャル諸島共和国、日本の両政府国連代表部の共催で「軍縮教育—被爆者と若者の役割」と題したイベントを実施。

コリント(ニカラグア) 2010年



**ダニエル・オルテガ大統領**  
ピースボート寄港に合わせて船を訪れ、公式歓迎式典にて被爆者ら参加者との交流。同国で最も名誉のある「文化独立勲章」を被爆者2名とピースボートに贈った。

ハーグ(オランダ) 2016年



**バート・クーンデルス外務大臣**  
核兵器禁止条約の交渉開始を求める国連の決議を支持するよう、現地の平和団体「PAX」のメンバーとともに要請した。

カルタヘナ(コロンビア) 2011年



**ファン・マヌエル・サントス大統領**  
コロンビア寄港の際に面会。被爆者の証言活動を激励した。その後52年に渡って続いたコロンビア内戦の和平合意に尽力したことを評価され、2016年ノーベル平和賞を受賞。

# ICAN 核兵器廃絶国際キャンペーン ノーベル平和賞受賞 ピースボートとの関わり



**川崎 哲**  
Kawasaki Akira  
ICAN国際運営委員  
NGOピースボート 共同代表

この平和賞は、広島・長崎の被爆者の皆様をはじめ核兵器廃絶を願って勇気をもって声をあげてきた全ての人たちに向けられたものです。そして、日本を含む全ての政府に、一刻も早く核兵器禁止条約に署名・批准することを求めています。



**マイレッド・マグワイア**  
Mairead Corrigan Maguire  
1976年ノーベル平和賞受賞者  
ピース・ピープル

ICANのノーベル平和賞受賞は素晴らしいことで、ピースボートもその一員として、長年核兵器のない世界を目指してきました。私たちはこれから、世界に住む仲間が決して核兵器の被害を受けないよう、全力を尽くしていく必要があります。その希望の光としての活躍を願っています。



**ジョディ・ウィリアムズ**  
Jody Williams  
1997年ノーベル平和賞受賞者  
ノーベル・ウィメンズ・イニシアティブ代表

核兵器廃絶のために人生を捧げてきた被爆者の方々が、強く、明確に核兵器の恐ろしさを訴えてきたことが、核兵器禁止へのうねりの大きな原動力となりました。これまでのたゆまぬ努力に感謝をし、多くの人びとの取り組みを認め、ノーベル平和賞の受賞を心から祝福します。

ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)は、101カ国468団体\*が参加する国際的なNGO(非政府組織)の連合体です。2007年の発足後、各国政府や赤十字と連携し、核兵器の非人道性に関するキャンペーンを展開。2017年7月の核兵器禁止条約の採択に大きく貢献し、同年ノーベル平和賞を受賞しました。

ピースボートはICANの国際運営団体です。世界10団体で構成する国際運営グループの一員として、ICANの国際的な活動を牽引してきました。それを支えてきたのは、ピースボートの船旅を通じた広島・長崎の被爆者の方々の訴えです。(\*2017年10月現在)



# “核なき世界”の実現にむけて

ピースボートは被爆国・日本に本部を置く国際NGOとして、被爆者の方々とともに核兵器の非人道性を世界に訴え、核兵器廃絶に向けて活動してきました。

特にこの10年間は、世界一周クルーズに170名余りの被爆者の方々を招き、世界各国で政府首脳や国会議員との面会、そして学生や市民に向けた被爆証言会などを行っています。

私たちは、これからも被爆者の方々とともに、核兵器の恐ろしさを世界の人々に直接訴え、核兵器廃絶への国際世論を作り続けます。



ノーベル平和賞発表翌日に行った  
レイキャビク(アイスランド)市庁舎での被爆証言会



おりづるプロジェクトは、2008年から2017年までの10回のクルーズで実施。170名以上の被爆者の方々とともに59カ国84都市で証言を行ってきました。(2017年現在)

## 被爆体験を世界に伝える「証言の航海」

ピースボートは、核兵器の非人道性を訴え、核廃絶を実現するために「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」(おりづるプロジェクト)を実施してきました。

地球一周の船旅に広島・長崎の被爆者の方々が乗船。世界各地で原爆被害の証言を行い、核廃絶のメッセージをアピールしてきました。

日本政府の非核特使としても公認された被爆者の方々が世界をめぐる航海



## グローバル・ヒバクシャのつながり

広島・長崎の被爆者だけでなく、タヒチの核実験被害者やオーストラリアのウラン採掘労働者など世界各地の「ヒバクシャ」と交流してきた私たちは、グローバルなヒバクシャのネットワークが必要だと感じ、世界で活動を続けてきました。3.11後は福島やチェルノブイリの原発事故被害者の方々とつながっています。

国際社会に核実験被害を訴えたオスカー・テマル仏領ポリネシア前大統領(右)



# 核廃絶のためのピースボートの活動と、ICANとの歩み

1983年	9月/第1回ピースボートが『1000カイリシーレーン』をみつめ、反核をたたかう太平洋の島々と交流する船旅』をテーマに出航。	2011年	1月/第4回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」13カ国14都市で証言活動を実施。  3月/ICANの運動が世界に広がり規模が拡大。スイス・ジュネーブに本拠地を移す。
1986年	8月/ピースボート第4回クルーズにて、パラオの非核憲法を守る人々「キッタレン」と交流。以降、クルーズ寄港の度に活動を共にする。	2012年	1月/第5回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」12カ国12都市で証言活動を実施。
1990年	12月/ピースボート初の世界一周クルーズにて広島・長崎港に寄港。世界一周を通して被爆者の声を世界に伝える活動を行う。	2013年	3月/第1回「核兵器の人的影響に関する国際会議」がノルウェー・オスロにて開催される。
1997年	7月/'99年までの各クルーズで、広島・長崎・南太平洋・チェルノブイリをテーマに「ノーマ・ヒバクシャ・プロジェクト」を実施。	2014年	7月/第6回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」12カ国14都市で証言活動を実施。  2月/第2回「核兵器の人的影響に関する国際会議」がメキシコ・ナジャリットにて開催される。  3月/第7回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」12カ国14都市で証言活動を実施。  7月/ICANの執行部として10団体が国際運営グループ(ISG)を形成。日本からはピースボートが国際運営団体となり、代表して川崎哲がICANの国際運営委員となる。
1998年	6月/インド・パキスタンでの核実験直後に、現地で「広島・長崎原爆写真展」を実施し、核実験反対を訴え、人々に核の危険性を伝えた。	2015年	12月/第3回「核兵器の人的影響に関する国際会議」がオーストリア・ウィーンにて開催される。  4月/第8回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」19カ国25都市で証言活動を実施。  12月/国連総会にて、国連総会決議「多国間核軍縮交渉を前進させる」が採択される。
2007年	「核戦争防止国際医師会議」(※1)の運動から派生し、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)が設立。オーストラリア・メルボルンに拠点を置き、世界中に運動が広がる。	2016年	8月/第9回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」13カ国14都市で証言活動を実施。
2008年	9月/ピースボート第63回クルーズにて103名の被爆者を乗せ、初の「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」を実施。22カ国25都市で証言活動。  10月/オーストラリアと日本の政府が共同で「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」を立ち上げ。NGOアドバイザーにICAN創設者ティルマン・ラフ氏とピースボート・川崎哲が就いた。	2017年	4月/第10回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」18カ国21都市で証言活動を実施。  7月/ニューヨークの国連本部で開かれた条約交渉会議において、核兵器禁止条約が採択される。  10月/ICANがノーベル平和賞を受賞することが発表される。(※2)
2009年	8月/第2回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」19カ国20都市で証言活動を実施。		
2010年	4月/第3回「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」17カ国22都市で証言活動を実施。  5月/「核不拡散条約(NPT)再検討会議」で、核兵器の非人道性が再確認され、国際社会では人道上の観点から核兵器を検証する動きが活発化する。  5月/ピースボート・川崎哲がICAN副代表に就任。これを機にピースボートは団体としてICANに正式加盟。川崎は2012~2014年までICAN共同代表を務める。		

※ 赤字はピースボートの船旅を通じての活動

※1 核戦争防止国際医師会議(IPPNW) 1980年設立。1985年「核戦争がもたらす破壊的な結末について信頼できる情報と理解を広めたことへの貢献」によってノーベル平和賞を受賞。

※2 ノーベル委員会のペリト・レイス＝アンデルセン委員長は、核兵器禁止条約の成立に向けたICANの「画期的な努力」を授賞理由に挙げた。